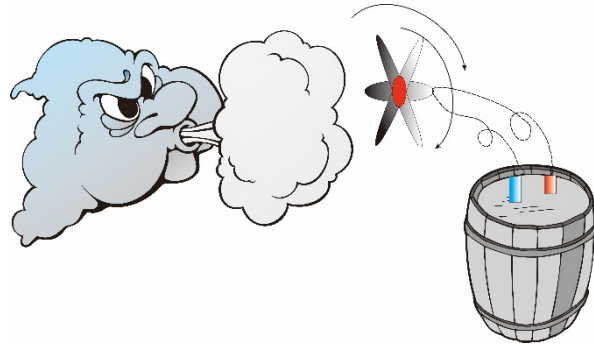


小さな間違いが大きな問題に

関西大学 社会安全学部 小澤 守

最近のある新聞に看過できない記事を見つけた。次の東京オリンピックにおいて、日本の将来のエネルギーの中心に水素をおくことのデモンストレーションの意味もあつてか、聖火などにも水素を燃料として用いるとの内容である。その記事そのものに文句をつけるわけではないが、水素についての解説が筆者にとってはとてもいただけないものであった。すなわち、水素燃料は「燃焼時に二酸化炭素を排出せず、地球上に無尽蔵にあることから…」との一節が気に食わないのである。記事を書いた記者氏には悪いが、水素についてまるで分かっていないことを問題としている

水素は、元来、地球上に自然に存在する気体ではない。水素は工業的に製造しなければならない気体であり、常圧では -252°C にまで温度を下げないと液化しない。従って大量貯蔵や輸送には、太陽光や風力発電を用いた電気分解で製造するにしても、圧縮や液化に大きな動力が必要になる。これさえも水素でまかなうことができればいいが、容易なことではない。また現在オーストラリアで進行中の褐炭ガス化による水素製造にしても、発生する二酸化炭素をある程度固定化（CCSという）するにしても、まるで二酸化炭素排出0というわけにはいかないだろう。



件の記者氏が、地球上に水がそれこそ無尽蔵にあるから、それを分解して製造する水素も無尽蔵だと判断したのかどうか仔細は不明であるが、一般市民に間違った情報やイメージを与えるのはいかがなものか。新聞の使命は物事の陽も陰もともに明らかにして市民に正しい理解をしてもらうのを旨としているはずであり、それこそが社会的責任である。報道の自由が確かに重要であるのは論を待たない。しかし事実と異なる報道をする自由はないはずである。

かつて大阪万博の際に、原子の灯がともったともてはやしたのはマスコミであった。その当時から事故の問題や廃炉の問題、高レベル廃棄物の問題はあつたはずであるが、とんとそのような報道はなされなかったように思う。みんな一緒に浮かれていたともいえるだろう。それが一旦事故が起こると全く反対の嵐が吹き荒れる。すべてをマスコミや新聞の責任にするつもりはないが、市民に夢を与えるのも、現実に引き戻すのも重要な役割であると肝に銘じて、少なくとも正しい報道を心がけてはもらえないだろうか。「無尽蔵」というたった3文字の些細な問題かもしれないが、それによって引き起されるであろう市民の誤解は大変大きい。そしてそのような誤解によって、今、本当に必要なことが見過ごされ、議論がなされないこともありうるのである。

小さなトラブルが大きな問題になって発現した例は、スリーマイル島原発事故やスペースシャトルチャレンジャー事故など枚挙の暇もないほど多い。チャレンジャー事故はブースターロケットのOリングの弾性が気温の低下で損なわれたことによる。失われた搭乗員たちのかけがいのない命とチャレンジャーの費用に比べれば、Oリングなどはほんのちっぽけなものであった。小さな問題とっておろそかにはできないものもある。

ところで同じ社の新聞にソーラーセルの廃棄費用に関する記事が掲載されていた。2,000 kWのパネルの廃棄費用が2,400～3,400万円かかるとの報道である。寿命が尽きて発電能力がなくなったら、それまで高価格で電力を買い上げてもらっていたにも関わらず、廃棄費用が大きいとってそのまま放置されるのではないかと気がかりになる。なおほとんどのパネルは斜面などに設置された簡単な台に載せているだけで、台風などで吹き飛んでもおかしくないものまである。吹き飛んでも黙っていてくれればまだまだが、発電し続けることもありえて、その場合には漏電、火災の危険性さえある。

今回話題にした水素のみならず何でも無条件に全て良しということはない。重要なのはどこで手を打つかであって、その線の引き方には社会的な合意形成が必要となる。「無尽蔵」を取り上げたのは、そのような小さなことであっても間違った報道は社会的な合意形成に大きく影響する、捨て置けない問題であると思ったからである。